



東九州支部報



平山善吉会長を囲んで (7月28日)

《 もくじ 》	
平山会長をお迎えして	1
野稻岳へ	2
水分峠付近	3
大石峠から一尺八寸山へ	4
隊列登山に考える	5
平成15年登山記録	6
私の無名山ガイドブック ^⑩	7
お知らせ	8
後記	8

平山会長をお迎えして 賑やかに懇談会

報告 加藤英彦

昨年八月に、日本山岳会の新会長に就任されたばかりの平山善吉会長が十分にみえる機会があるというので、支部にお迎えして歓迎会を開いたが、今年もまた会長が日本文理大学の夏期講演に来分中の機会をとらえて、第二回目となる懇親会がもたれた。

日時は去る七月二十八日(木)の午後六時三十分から、場所は大分市内「第一ホテル」の八階「豊後」の間で。集まったのは会員、会友二十八名に会長として同行された建築工学博士の柿崎正義先生の計三十名。

まず、梅木支部長より歓迎のことばと、昨年に続きこうして支部会員と直接親しく懇談できる場に気軽に出席して席頂いたことに対するお礼のあいさつがあった。続いて会長があいさつされ、その中で特に、来年にせまった当会の創立一〇〇周年の事業について次のように話された。

準備は着々と進んでおり、事業部門においては文化事業、一〇〇年史の編纂、日本山岳誌の発行のほか、記念登山、記念式典、記念フォーラム当についても鋭意検討が進められている。そしてすでに取り組みが展開されている「中央分水嶺踏査」も登山部門にける会員全員参加の事業として意義あるもので、各方面からも注目を集めている。また、これらの事業推進のために約八五〇〇万円の仕事費予算も必要であり、会員に対して特別募金四〇〇万円を目標に、会費納入時に毎年三〇〇〇の上乗せ募金をお願いしており、ご協力頂きたい。(次頁へ)

以上の会長のあいさつの後、出席者のうちで最長老である安藤会員の発声で、全員で乾杯し、歓談の場に移った。

宴会の途中から出席者の自己紹介と近況報告等が順次行われることになったが、その皮切りに立たれたのが、当日特別参加として会長と一緒に出席された柿崎博士である。氏は会長の友人で、一緒に文理大学の講座に招かれていたとのことである。

平山会長は登山家としても著名であるが、構造力学系の建築学者としては、国内でも有数の学者であることが紹介された。そして、二〇〇二年九月一日のアメリカでの同時テロの対象となった、ニューヨークの「世界貿易センタービル」の崩壊等について、構造力学的観点から見た話があった。これは、一見山の会には不釣り合いな話題であったが、大変ユニークで興味深い話であった。

その後、順次出席者から自己紹介と最近の活動報告や近況報告が行われ、しばし歓談の後、全員で記念の写真撮影。そして宇津宮副支部長より締め言葉と万歳三唱で賑やかな会は終了となった。

また来年も会長が大分にみえる機会があれば、第三回目を続けていきたいと念じつつ報告を終えます。

野稲岳へ

(七月月例山行報告)

佐藤 秀二

七月二十五日(日)午前五時にサニーに集合して出発。途中市内で久々に参加の佐藤正八さんと合流し、さらに水分峠で飯田さんと合流して、全員そろって野稲岳へ向かう。

水分峠からやまなみハイウェイを走り、野稲岳の手前で林道に入る。林道に入って二、三〇mで左手に林道分岐が現れて入り口にゲートがあり、ここから登る。ゲートは野稲岳にある中継所の私道。

ゲートの横には人が通れるほどにあいている。七時ちょうどに出発し、ゲートからほぼ平らな道を二〇〇mほど行くと最初のカーブがあり、プレハブの小屋がある。このあたりが分水嶺の稜線上で、ここから稜線をたどることになる。鉄塔のある山頂までピークが三つあることが眺望できる。

山に入るといきなりの藪。足下は腐った倒木と前日の雨のせいもあってポコポコの状態で歩きにくい。いつものように飯田さんが先頭を進むが、小さな木が茂っていて歩きにくいようだ。三〇分ほど藪を抜けてやや平坦なところに出る。ここから見

通しの良い自然林の緩い稜線登りだ。五分ほど登ると最初のピークに到着。七時四〇分、九一九mの標高点で北半分が自然林、南側がヒノキの植林地である。

ひと休みの後そのままヒノキの尾根筋にある踏み跡を進むが、道は下るばかり。次のピークが時折り見えるが離れるばかり。どうやら下る方向を間違えたようだ。ヒノキの疎林の山腹をトラバース気味に引き返し、浅い谷を登り返して次のピークとの鞍部に出た。その昔「鞍部(あんど)」を「クラブ」と読んでいた方があるらしく、「クラブに着いた」など談笑しながらひと休み。その間に先頭組の三人は先ほどのピークに登り返して、帰ってきて「正しく分水嶺を歩き直しました」とのこと。

次のピークに向けてヒノキの植林の中の急登を進む。一五分ほどで自然林となりさらに二〇分ほどで二番目のピークに着いた。八時四〇分、標高九七〇mのピークに到着である。ブッシュの向こうに野稲岳山頂の鉄塔が見え、その方向にそのまま進む。低木の藪をかき分けながら一旦緩やかに下った後、山頂に向かって緩やかに登っていく。

二〇分ほど登っていくとやがて次第に平らになり、広い野稲岳山頂の一角に着くが鉄塔はまだ向こうの方である。右に左に藪を分けながらの緩やかに下り、更に緩く登っていくと突然藪が

ひらけて鉄塔の脇に出た。九時三〇分、野稲岳山頂到着である。ここは三角点が雑木草の中にあり分かりにくい。今回も少し探したが、すぐに見つけ出した。三角点のまわりの草を刈り払って、パンザイと記念写真撮影のあと小休止。



(野稲岳山頂にて)

まだ早いので、ここからさらにこの先の九三四mのピークまで行こうということになって、鉄塔の裏側に回って藪の中に舗装道路は地図に書かれたくないが、分水嶺を寸断して造られているようだ。

この下りが意外な曲者で、小

結構大変で枝をかき分けながら進む。ここで一人足を痛める。

いったん道路に出て、道を下り、再度スギの植林地の中に入り、めざす小ピークへと向かう。スギ林の中を緩く登っていくと、やがてピークにたどり着いたものの、だだっ広い鈍頂で、何処が最高地点か分からない。地図上は標高点なので四等三角点でもないかと皆で手分けして、見通しの良いスギ林の中を探すが見あたらない。

一〇時五〇分、一応最高地点と思われるところを確認して引き返した。再び舗装道路に出て、入り口から延びる私道との三叉路で昼食となる。遠江さん持参のソーメンに皆が舌鼓。山でソーメンとは珍しいが、ラーメンとはひと味違った美味しさである。

三〇分ほど休憩して、私道をゲートに向かって戻っていく。約一時間の林道歩きで、車を置いて最後のゲートに戻った。ここで最後のご褒美に、安部さん家庭農園の無農薬のスイカを頂いた。これがよく冷えていてとても美味しい。皮の白い部分まで飛んだ気分だった。楽しくスイカを頂いた後、それぞれ帰途につきました。

参加者：安部、飯田、佐藤(秀)、佐藤(正)、田所、遠江、中野、長野、西、橋本

追記

《台風一六号、一八号による被害について》

今年八月から九月にかけて襲来した台風一六号、一八号は、宮崎県山間部を中心に大変な被害をもたらしています。特に椎葉村近辺における被害は甚大で、豪雨により谷あいのはほとんどは鉄砲水や土石流が出ています。このため通行止め箇所がかなりあり、今も復旧作業が続いています。九州脊梁の宮崎県五ヶ瀬町、椎葉村、西米良村方面に山登りを計画されている方は、地元自治体などに道路情報や登山道情報を確認されて計画することをおすすめします。

水分峠付近

(八月月例山行報告)

中野 稔

八月二十九日(日) 大型の台風一六号が九州へ近づく中(翌日午前九時に鹿児島県川内市に上陸)、四名の有志は釜が瀬山(陸)、四名の有志は釜が瀬山(陸)向かうべく、国道二一〇号線の日田へ向かっていた。勇気と奮勇は知性で別けられると思う。雪や嵐の中では、高度一千メートルを超えると平地での常識は通用しないのが、山の常識だと思うのは私だけだろうか。

- 野稲岳 (のいねだけ)
- 【標高】 1037.6m
- 【行政】 大分県大分郡湯布院町
- 【経緯度】 北緯: 33. 13. 13^o 東経: 131. 17. 33^o
- 【水系】 筑後川水系玖珠川(大分川水系大分川(支流))
- 【一万五千図】 湯平: NH52-59
- 4 大分9号4
- 【五万図】 湯平

大分から出発の三人の車が五時にサニーを出て小一時間過ぎた頃だった。水分峠を過ぎ、玖珠に近づくころ、別府から出た飯田車から携帯が入った。この天候の中を、予定通りのコースを行くのはおっくうだというコメント。ベテラン二人の判断で行き先を変更すべく、豊後中村のとあるスーパリーの駐車場で待ち合わせた。

釜が瀬山付近は踏み跡があるうが、所小野山付近は二年前に支部月例山行で行った時には猛烈なブッシュであった。この悪天候でのヤブこぎは無謀だということになり、さりとてここまで来て無為に引き返すのもJAC会員としての誇りが許さな。そこで急遽決まったコース

が水分峠だ。分水嶺つながりで、水分峠から野稲岳の間を起点として水分峠に戻るルートが、イメージの中で決まった。嵐の前の静けさか、風はさほどないがかなり激しい雨が大地を包んでいた。予定外のルートであったため、誰も地図など持っていない。しかし、県道十一号(九州横断道路)に沿った浅いヤブ山だ、たいしたことはない。この事が後で無用なる一時間の山歩きを体験する事になるが、迷ったら、初心に帰れと言う事を、先日宮崎から大分に帰る時に追体験をした。一台を水分峠に置き、もう一台で踏査開始地点に向かう。水分峠から約三キロほど野稲岳に向かったところの、県道沿いに低い鞍部がある。広場になっていて「大分水分ふれあいの森」「漁民の森」などのプレートがありロープが張ってあった。

ここに車を置いて、雨具をつけ、七時二五分出発する。最初古い林道の跡があったが、すぐにヤブになった。カヤを分け、ササを分けていくと、四十五分に標高点八一四mの地点に着く。西北西に二七〇メートルぐらい行くと二つ目のコブに着くが、その辺から北へ行かねばならない所だ。地図とコンパスが無ければ正確には歩けない。植林と自然林が稜線を分けている。七時五十分ごろ広い平らな頂に着いた。絶えず車の音がして、

(芝塚にて)

ここから少し引き返し気味に東に行くべき所であるが、地図を持たずにヤマ感でまっすぐに稜線をたどって行ったのが間違。はつきりした地形の稜線で、なぜか踏み跡もすっかりついて

薄暗いスギやヒノキの造林地は歩きやすく、どんどん進んで行く。次第に高度が下がるにつれ高速道路の音が近くなり、なぜかGPSの示す水分峠が遠くなっていく。向かう方向がなぜか北西だ、??、このあたりでやっと進むべき方向が間違っているのに気づく。登り返すのが面倒と、山腹をトラバースしかけるがとんでもない遠回りに気づき、稜線を途中まで戻っては

北向きに軌道修正しつつ下るが、また間違いに気づく。トラバースしかけるがこれもまた遠回り。仕方なしに振り出しに戻るべく、ふうふう言いながらも来た稜線を登り返す。

約一時間かけて造林地の中を彷徨したあげくに、やっと芝塚の三角点に戻る。正確には芝塚の三角点は分水嶺から少し筑後川流域に入ったところにあるのだ。

そこから東に向かつて下る。すると少し下ると県道のすぐ脇の鞍部である。ここを通過し、

高速道路のトンネルの上を通過して稜線をたどると、十時ごろ雨の中を西さんがドライブインで短い首を長くして待つ水分峠に着く。芝塚から水分峠まで直線わずか一キロの距離だ。携帯GPSだけでは、ヤブ漕ぎ登山は無理だという事を身をもって体験した貴重な山行でした。

参加者：飯田、田所、中野、西

水分峠 (みずわけとうげ)

【標高】 707.0m

【行政】 大分県玖珠郡九重町

大分郡湯布院町

【経緯度】 北緯：33. 14. 59

東経：131. 17. 43

【水系】 筑後川水系玖珠川、大分川水系大分川(支流)

【二万五千図】 湯平：NH5251-9

大分9号4

【五万図】 別府：NH5251-9大分9号

大石峠から水分峠へ

(九月月例山行報告)

安部可人

九月二十五日(日) 午前五時、もう雨が降り始めた。サニー店

を中野車(西、徳丸)、安部車(園田、今山、長野)の二台で出発。一般国道を一路日田へ。玖珠に入ると雨は降っていない。七時少し前に日田インター出口のローソンで飯田車(遠江)と合流。今日の山行を取材(日本山岳会の中央分水嶺踏査について)するという、朝日新聞社大分支局の大久保氏もここで合流する。

飯田車を一尺八寸山の稜線上にあるNHKアンテナ(尾当山五三四m)に車を置くために、中野車と二台で尾当道へ向かう。他の二台は奥耶馬トンネルの山側出口で待ち合わせ、中野車と合流後大石峠へ向かう。

大石峠は奥耶馬トンネルの出口のすぐ近くだが、地図と現地の大石峠への入り口とが(道路工事により)食い違っていて分りにくく、大石まで引き返して民家で道を尋ねる。すると、教えてくれた主婦が我々の山歩きの趣旨が理解できていないため心配して、わざわざ車で追いかけてきて、「一尺八寸山に登るのなら、道は別のところにあるんですよ。大石峠から登る道などありませんよ」と念押しにきてくれた。土地柄か、実に優しい心遣いである。「心配ご無用です。道のないところを行くのが目的ですから」と答えると怪訝そうな顔でまだ心配そう。

八時三十分に出発。市道から峠への旧道に入り、荒れた道を

七、八分登ると半ば崩壊した素堀りの古いトンネルが現れた。そのトンネルの三〇mほど手前から左のスギ林に踏み込み、急斜面を登っていくと一五分足らずで稜線に出て、わずかに左に下ったところが鞍部となっている。この狭い小さな鞍部がトンネルの真上あたりで旧大石峠である。

ここからが分水嶺踏査ルートで、少し引き返してそのまま稜線を登っていく。両側はスギの造林地だが、稜線はアセビやヒシヤカキ、ツゲなどの低木のブッシュで、その中を右に左にかき分けて登っていく。

腐った倒木を越え、鎌で枝を払ったりしながら前の二人が進むと、三人目から歩きやすい道が出来る。峠から一〇分足らずで地図上の五〇四m地点を通過。稜線はさほど濃いブッシュではなく、わずかに獣道のような踏み跡もあり、数十メートルおきに点々と「国調筆界」と書かれた、頭の部分だけ黄色い黒い杭もある。

九時五〇分、五五〇m地点を通過すると、広いなだらかな稜線はいっそう歩きやすい赤松や照葉樹の混交林となり、先頭を行くI氏やS氏はキノコ採りを始めた。

広い尾根はほとんどブッシュもなく、疎林の中を水源涵養保安林と書かれた菱形の標識などを見ながら緩やかに登っていく。

そしてやがて広い平らな台地となった。地図を見ると標高五七〇mの地点である。時計は一〇時一八分、登り始めて約一時間四〇分である。ここで休憩。

「山」と彫り込まれた石柱がある。尾根まで六〇〇mと、GPSを見ながら中野氏が言う。

スギやヒノキのかすかに霧がかかって風もあり、暑さはほとんど感じない。あたりのスギはよく手入れされていて、白地に黒で「調」と所有者を記したものを付けているのは珍しい。傾斜はいっそう緩くなり、広い山腹を歩く感じで分水嶺歩きの実感はない。標高六〇〇mを過ぎて少し行くと突然古い林道に出た。山腹を真横にほぼ水平に林道は走っている。道を横切りの面を越えてヒノキ林をさらに緩く登っていく。造林地の林床に低い籬が数多くあり、進むと二度目の林道に出た。これは主稜上を尾当方面から一尺八寸山まで続いている林道である。

林道を横切り数十メートルで主稜に着いた。一〇時五五分である。ここで小休止。気温は二五度。薄曇りの空から陽も射してきて、風もなく蒸し暑い。再出発で、登ってきた方向と直角に東に向かう。少し下ると主稜線上の林道を歩くこととなった。林道は日田市と山国町境を東に、ほぼ正確に分水嶺上を走っている。ところどころ右手(南側)がひらけて、「あれが月出山岳、

遠くが亀石山、湯ノ見岳」と飯田氏が教えてくれた。



林道はカヤやササがうるさいがほとんど平らである。道が左へ分かれる分岐点に「車両通行禁止」日田市森林組合の看板があり、そこには「ガンバレ、あと一〇分、かんだサル」の札も下がっている。

そこから最後の登りとなる。林道は猛烈なカヤに覆われているので、まるでラッセルの登りである。かんだサルが一〇分と書いてあったが一五分近くかかると、一・一三三分、標高七〇六・七mの一尺八寸山の山頂到着。広く平らな山頂の、二等三角点名「とその謂われを書いた石標をはじめ、多くの立て札が立つてにぎやかである。

ここでやっと昼食。小さな空き地にめいめい腰を下ろして弁当を開く。缶ビールやワイン

(一合)、缶コーヒー、他に五〇〇円のお茶はまだ残っている。今日は水分をあまりとらなかつた。



(一尺八寸山にて)

一二時一五分、下山開始。その前に恒例のパンザイとヤツホーは「もう二度とこないから」と西さんが自ら音頭を取る。主稜に登り着いたところまで引き返した後、そのまま車を置いてあるアンテナまで行くのである。飯田、園田、中野、それに朝日新聞の大久保の各氏は急いで下り、大石峠下に車をとりに行くことになる。長い林道歩きの道なので、女性群に痙攣やら捻挫やらの軽い故障があった

りして、約五キロ、二時間近くかかってアンテナのところに着いた。ここで車を待ち、三時ちようど、迎えに来た車に分乗し流れ解散となった。終始ユーモアのある会話や、ヤブこぎや、ルートファイディングやと今回も楽しいかった。

参加者：安部、飯田、今山、園田、徳丸、遠江、中野、大久保(朝日新聞社)

※ この日、分水嶺踏査の取材のため同行した大久保さん記述の記事は一〇月六日の朝日新聞大分版に登載されました。

一尺八寸山(みおうやま)

【標高】706.7m

【行政】大分県日田市下毛郡山国町

【経緯度】北緯：33. 21、35[≈] 東経：131. 02、27[≈]

【水系】筑後川水系山国川水系

【二万五千図】裏耶馬溪・中津16号

【五万図】耶馬溪・中津16号

「隊列登山」に考える

加藤英彦

「困るなあ・・・、東九州支部の方たちは。ちゃんとして登ってくれなければ。」そう言われたのは去る一〇月三日(日)の十二時過ぎ、阿蘇高岳の山頂のことであった。

一〇月二、三日は第二十一回全国支部懇談会『阿蘇の集い』というところで、熊本支部主催で開催された。一日目(二日)が懇談会で、熊本市の「交通センターホテル」に本部から平山会長をはじめ本部役員が出席のもと、斉藤前会長を始め全国各支部から一三七名、地元熊本支部四〇名、計一七七名の参加のもとで盛大に開かれ、東九州支部からも十三名が参加した。

懇談会では冒頭に過日亡くなられた宮崎支部長の大谷優氏、本部役員の小倉茂輝氏のご冥福を祈って黙祷を捧げ、続いて地元支部長の歓迎あいさつ、平山会長のあいさつが続いた。この後、阿蘇火山博物館長の池辺伸一郎氏の記念講演で、『阿蘇火山について』と題して阿蘇山と火山についてスライドを交えて講演があった。

そのあとは恒例の懇親会で、鹿本農業高校郷土芸能伝承部の

『山鹿灯籠踊り』やチャージャー永谷氏のカントリーウエスタンの演奏などのアトラクション、続いて各支部が順番に各種出し物を披露するなど、大いに盛り上がったところである。

翌日の記念山行は阿蘇の高岳で、東九州支部の参加者八名は一足先にマイカーで仙酔峽に着き、そこに待機していた熊本支部の係の人に「足の遅い人がいますので、一足先に登ります」と断って出発した。前夜のアルコールも抜け、尾根をゆっくり時間をかけて登り、また、久しぶりに天狗の舞台に上がり、かつて挑戦した鷲が峰の崖壁をまじかに眺め懐かしく思い出しながら記憶をたどり、そしてやつと高岳山頂にもどり、食事をして、くつろぎの一時をすごしていた時のことである。

遅れて隊列をなして登ってきた熊本支部のA班(健脚コース)のリーダーが、我々に対して冒頭の言葉をかけたのである。「下山は隊列を組んで下ってください。先に行動してくれれば困る。」と言う。

我々東九州支部の参加者は、先行して行くこのことを駐車場にいた熊本支部の係の人に、名前を告げて説明してきたのであり、特に西さんはペースが遅いので先に出発して皆に迷惑をかけないようにしたつもりである。また、これまで何処の支部の会合に参加してもそのように

行動して了解を得てきたところであることを説明したが、「下りは絶対に勝手に先に行ってもいけない。」そして「もし従わなければ考えがある・・・。」とまで言うのである。

そして、食事後の一二時四十分に出発するということになった。ここで宮崎支部の三〇名近くの大部隊が先を下ろうとしたものだが、熊本支部のメンバーたち(ダイダイ色のジャンパーを着ていた)がそれを止めて、列を作って下ってくれと言っている。

まったくおかしなことではなからうか。本来山登りとはなんであるか。そのことが分かっているのであるか。もつと自由な行動をさせても良いのではないかと私は思った。

我々が登っている時に追いついてきた福岡支部のNさんは、出発時に先に行つては困ると言われたので、「自分は帰りの時間があるから先に行く。そんなに言うのなら私はここからは、この支部懇談会の山行には参加しなかったことにするから、ここからは自分一人に勝手にさせてくれ」と言つて、一人で先に下山していった。我々もこんなことならこの山行に申し込まずに、勝手に登つたことにすればよかったと思つた。ザックに熊本支部と書いた、JACのマークの入った小さな旗を背負つたりリーダーが先頭で、

後にまるで軍隊の行軍みたいに、

行儀正しく隊列を組んで下山し

始めた。こうした姿はいかにも

偉いリーダーのもと、統率のと

れた山行のように見えるが、何

しろ一〇〇名近い参加者が隊列

を組んでの下山である。一般の

登山者には大迷惑でもあろう。

登ってくる人たちにとっては離

合が大変なことである。後ろか

ら下ってくる人は渋滞を起し

ながら遅いペースで下る隊列を

追い越すことも出来ないのだ。

なにしろ、隊の前方や中程で

ペースが狂うと後ろでは大変な

渋滞となるのである。せめて隊

を二、三に分けて、一定の間隔

を置いて下れば大渋滞にはなら

ないだろう。

(阿蘇高岳にて)



中岳をすぎて火口のふちで休

憩の号令が出たが、これも気配

りに疑問を感じた。あと五、六

分も歩けばトイレのあるロープ

ウェイの駅舎があるというのに

……。トイレを要する人は休

憩どころではない。何しろ仙酔

尾根のかりからここままで

「お花摘み」出来るところはな

しかったのだろうか？再考を要

する登山会ではなかったのかと

の思いが強い。

(一参加者の私見)

「追」福岡支部のNさんにこの

件を話したところ、お便りを頂

いた。「熊本支部リーダーの言

動の件ですが、全く同感です。

福岡支部の連中に話したところ

『余裕がなさすぎるな』『も

っと気楽に登らせなきゃ』など

の意見が出ました』とのこと。

平成一五年 登山記録

児玉章良

今年も百山登ることを年頭に

置いた。しかし、一月は修学旅

行があったため〇山となかった。

二月も研究授業やらで耶馬溪町

の「雁股山(二等)」、安心院

町の「烏帽子山(三等)」、のみ

三月は本耶馬溪町の「羅漢寺山

(四等)」、白木山(四

等)」、ほぼ一年ぶりの月例山

行参加で宮崎県の「二ツ岳(三

等)」、耶馬溪町の「無戸(三

等)」。四月は年度初めて忙し

くて〇山。五月は連休に佐藤

(正)先生と宮崎県の「お化粧

山」「鹿納山」「鹿納ノ野」、

蒲江町の「愛宕山(三等)」、

「米突山(四等)」、背平山

(二等)、「仙崎山(三等)」、

「元嶽山(三等)」。六月は別

府の「黒岩山」「雨乞岳(三

等)」。七月は月例山行で熊本

県の「妻子ヶ鼻(三等)」、野

津町の「鳥岳(三等)」。八月

は竹田市の「群山(三等)」、

「小松尾山(三等)」、三重町

の「吉井山(三等)」、高屋山

住山(一等)、「中岳」。一

月は月例山行で熊本県「向坂山

(三等)」、「三方山(三等)」、

「白岩山」、院内町の「米山」

「高尾山(三等)」、福岡県の

「権現山(二等)」、「皿倉山」。

一二月は熊本県の「小川岳(二

等)」、「水呑ノ頭(三等)」、

宇目町の「天神原山(二等)」、

「横岳(四等)」、熊本県の

「猪ノ子伏(三等)」、「白髪岳

(二等)」、熊本県の「甲佐岳

(二等)」、宮崎県の「愛宕山

(二等)」、「遠見山(三等)」、

「高平山(四等)」、「速日ノ峰

(一等)」、「行勝山雄岳(三

等)」、「行勝山雌岳」、そして

今年最後の締めくくりで二七日、

飯田勝之

いくつかのバリエーションルートについて

鳴子川から 平治北尾根へ

平治岳の北に延びる稜線ルートを歩いてみよう。吉部の大船林道のゲートから橋を渡り、すぐに右の樹林の中に入ると、鳴子川の右岸に沿って登る道がある。この道はゲートの少し手前から左岸沿いに坊ガツルに登る道とともに人影も少なく、九重では私の一番好きな道である。



(大船林道入り口)

左岸側の道はガイドブックや山の案内図に記入されていて、

昔からのノーマルルートで、坊ガツル賛歌の「・・・湯沢に下らない道である。しかし、右岸側の道は十年ほど前までは知る人も少なく、静かなだけにかりにくい道でもあった。ところが最近この道が結構知られてきて、通る人も多く、道も磨かれてきている。

橋を渡り林道から川沿いに入ると、少し先で、左の斜面に斜めに登るルートと、川沿いに進むルートに分かれる。どちらを行っても十数分で合流するが、川沿いの方は最近つけられた踏み跡で、ほとんど水辺近くを右に左に曲がりながら続いており、やがて左の斜面に直登するよう

に登って、左からきた道と合流する。ナラやエノキやカエデなどの美しい天然林の中のを、道は山腹を縫うようにごくわずかな登りとなつて続いている。三〇分ほどで登るとスギの造林地になり、絶えず聞こえていた鳴子川の水音が遠くなると、いきなり砂利道の林道に出会う。この林道は右手少し先で行き止まりとなつている。

林道を斜めに横切りさらに進むと再び天然林となり、両側は高い樹木が続く、その下は深いスズタケに覆われてきて、進むにつれて手つかずの自然度が増してくる感じである。ほとんど平らな道が、スズタケの中をく

ねくね曲がりながら山の斜面に続いている。

左上がりの斜面が緩くなり、広い緩斜面の山腹を回り込むようにカーブするところに、左に上がる小さな分かれ道がある。直進すると大船林道終点の少し手前になることになる。途中では少し先から右に、沢に向かつて下ると暮雨ノ滝の下に出ることもできる。

左に分かれ道を二、三分行くといきなり広い大船林道に出る。ここまで林道ゲートから約一時間である。林道を右にとると数メートル先で左の林内に小さな道の入り口がある。平治岳北尾根への道はここから二つあり、ひとつは林道をさらに二〇〇mほど行くと橋の先で林道が分かれています、左にほとんど平らな林道を、キロほど行くと左のヒノキの林内に小さな入り口がある。これを入り、ヒノキの中を山腹を巻くように緩く登ると大窓の鞍部に達することが出来る。

もう一つが林道に出たらすぐに左に入る道である。こちらの方が風情と変化があつて数段染し道である。コナラやカエデ、リョウブなどの天然林の中の落ち葉のクッションを踏みしめながら緩く登っていくと、道は少し急になり、山腹を左に、そして右にカーブしながら登って行くくと、前方が明るく開けてくる。林道からおおよそ二〇分で、広

くなだらかな稜線に出て、その北側斜面は広い伐採跡地となつている。崩平山からフキクサ山にいたる稜線や、その向こうには由布、鶴見が望まれて絶景である。

道は稜線を右に続いており、一、二分先で再び伐採地の上の端を通るので景色を楽しみながら進める。樹林に入るとごく緩やかなアップダウンの、心地よいプロムナードで、春先にはアセビやミヤマキリシマなどの花を楽しみながら進める。一三二八mピークの中腹を巻くようにして緩く下ると大窓の鞍部で、林道からきた道と合流する。

合流するとすぐに前方の斜面にとりつく。深い木立の天然林の中の急な斜面を登っていくと、突然目の前にアルミの梯子が現れる。以前は、木の枝や根っこ



に捕まりながら、悪戦苦闘して上り下りしたところで、ザイルを持参して通つたこともあるところだ。数年前に木の梯子がつけられた時には驚くと同時にがっかりさせられたが、その後少し立つと今度はこのような無粋

な有様だ。いったい何処の誰がこんなよけいなことをしたのかと、怒りすらわいてくる。

楽な思いで岩場を通過すると、再び急な登りで、深い樹林の中をジグザグに一〇分ほど登ると傾斜が緩くなり、木立もリョウブやノリウツギなどの低木に変わる。ほとんど平らな低い木立の間を、右に左に大きく迂回しながら道は続いていく。そしてさらに少し登っていると再び平らな明るいカヤ野に出る。ミヤマキリシマノ群生するカヤ野の正面には、高く平治岳山頂がそびえている。

平らなカヤ野を過ぎると再びノリウツギなどの低木の斜面となり、傾斜も増してくる。小さな谷状の斜面は夏は木立の中にヤマシヤクヤクやバイケイソウやマイヅルソウなどが花を見せているが、冬は深い雪が春先まで谷を埋めたままで、この平治の北斜面は九重山群では一、二を争う雪の深いところである。私はここを腰まで埋まって下つたこともある。

一旦木立のない、ミヤマキリシマノやイワカガミなどの多い斜面に出て、振り返るともうかなり下の方にカヤ野が見えるようになっていく。再びノリウツギなどの低木の木立の中を、木々のトンネルをくぐるようになっていく。そして、トンネルの向こうに明るい空間が見えてくると頂

上は近く、休日などは山頂にいる人の声も聞こえてきて、ひよっこりと頂上に飛び出す。このルートは一〇年ほど前までは知る人も少ない秘密の道で、かすかな踏み跡と、目印のテープを頼りに歩く静かな道であったが、近年かなりの人に知られてきて、道もすっかり磨かれてきた。



お知らせ

十一月月例山行の

ご案内

・月 日 十一月二十一日 (日)
 ※四月の定例総会で決められた日程より、一週間早くなっていますのでご注意ください。

・目的地 内匠ノ池から鹿倉峠
 (〜(玖珠町))
 ・出発 午前五時サニー発

十二月月例山行の

ご案内

・月 日 十二月十八日(土)
 ・目的地 三国山(上津江村)
 (重恒恒夫氏の三鼎境トレッキング)
 ・出発 サニー午前五時発

一月月例山行の

ご案内

・月 日 一月二十三日(日)
 ・目的地 水分峠からカルト山
 (玖珠町)
 ・出発 午前六時サニー発
 ※十一月、一月はヤブこぎが予想され、途中の水場は期待できませんので、ヤブ山歩きの服装と、十分な水を準備しておいて下さい。

支部忘年会

のお知らせ

今年も重恒恒夫氏を囲んで

・月 日：十二月十八日(土)
 ・場 所：杖立温泉
 「純和風旅館泉屋」
 TEL 0967-48-0924
 ・会 費：一〇,〇〇〇円
 (一泊一食)
 今年もおなじみの重恒恒夫氏を囲んで、支部忘年会を予定しています。詳しいことは後日、はがきで皆さんにお知らせします。日程を開けておいて下さい。なお、当日の昼は十二月の支部月例山行となつていきますので、山歩きに引き続いてご参加下さるようお願いいたします。

後記

- 十六、十八、二十一日と続けて九州本土に台風が上陸し、雨と風で山道はあちこちで崩壊や倒木などが見られます。
- 一〇月中旬のある日、鶴見半島の小ピークを拾いながら、ウバメガシの林を楽しむ山歩きをしました。
- ところが半島の稜線に沿って走るスカイラインは快適なドライブウエーですが、あちこちで道路の崩壊が見られて一部は通行止め。
- 一旦海岸の下つて稜線に回り込んだり、結構ハードなドライブとなりました。
- 三回の台風で、山の木々はすっかり木の葉が吹き千切られて、痛んだ葉でまだ青い山並みは変に色づき始めました。この分だと、紅葉本番にはあまり美しい色付きは期待できないみたいです。
- 秋もだいぶ深まり、家で飼っている鈴虫はすっかり鳴き声を潜めてしまった今日この頃です。
- あれ松虫が鳴いている♪♪では登場する虫たちの鳴き声を擬音語にして、「ああ、おもしろい 虫の声」と締めくくります。
- ちなみに、この擬音語をある本から拾ってみました。スズムシ：リンリンリン、マツムシ：チンチロリン、エンマコオロギ：コロコロリ、クツワムシ：ガチャガチャガチャ、ハヤシノウマオイ：スイーッチョン、ウスイロササキリ：チリチリチリ、クサキリ：ジー・・・ツ、アオマツムシ：フリリリン、ツムムシ：ジジジ：ジ、ヤブキリ：ジリジリジリ・・・。
- 私はカンタンの鳴き声が好きですがこの鳴き声を表せば「チンチンチン」となるのでしょうか。おもしろいですね。

(K・I)

日本山岳会東九州支部報 第27号

2004年(平成16年)10月25日(月)

発行者 梅木 秀徳

編集者 飯田 勝之

発行所 〒870-0021

大分市府内町1-3-16

サニースポーツ内 西 孝子方

TEL・FAX 097-532-0926

題字 佐藤正八